

『一つだけの宝物』

福島県 棚倉町立棚倉中学校 三年 鈴木 翔天 すずき とあ

今回、僕は「世田谷一家殺害事件」の犯罪被害者の方である入江杏さんから話を聞いた。

二〇〇〇年十二月三十一日、にぎやかな四人家族の幸せは突然奪われてしまった。事件が発覚してから大勢の警察官やマスコミなどが入江さんの家に押しかけ、事件について知っていることを聞かれたそうだ。僕は入江さんの話を聞いて、改めて命の大切さと幸せに生活できていることへのありがたみを痛感した。

今から四年前の九月に遡る。僕の大好きなひいおばあちゃんは、少し曇った日の早朝に天国へと旅立っていった。僕が幼稚園生の時にも母方のひいおばあちゃんが逝去していたが、まだ五歳という年齢だったので、「死んでしまった」という言葉の意味も分からず葬儀を終え、お別れをしてしまったので、人生で初めて死と向き合ったのは四年前の九月だった。僕は悲しくて悲しくて、しばらくたってもなかなか立ち直れなかった。

そしてもう一人忘れられない人がいる。その人は僕の二歳年上の先輩で、僕のいとこと仲が良く、僕にも優しく接してくれて、毎日笑顔が絶えない先輩だった。しかし僕が小学校四年生の時の五月の終わりに、その先輩は交通事故で亡くなってしまった。あまりに突然のことで「死」という現実を受け入れられず、自分の感情にも素直になれず今でも後悔している。

この二つの「死」を経験して僕は「命」という儂く、尊い存在の大切さを学んで強くなった。「人生」というのは長い道のりである。しかしそれを人の手によって短くしてしまった、終わらせてしまうようなことは絶対にあってはならないことだと僕は思う。全国ではいじめによる自殺が相次いで起きているとニュースを見た。いじめをする前にいじめによって生まれる利点は何か、自分がやられたらどういう気持ちになるのかを考えてほしい。

入江さんは今悲しみから立ち直ってグリーフケアという活動をしている。これは犯罪被害者の心をケアしてあげるという活動だ。

入江さんと同様に全国、世界中には家族や本人が犯罪に巻き込まれ、悲しい思いをしている人はたくさんいる。これはいじめも同様だと思う。加害者がいれば必ず被害者もいる。自分が加害者になってしまった、または加害者になりそうなことをしてしまった人は自問自答をしてほしい。命はみんな一つしか持っていない。その一つだけの宝物を失くしてしまつてからでは遅い。自分のことを制御できるのは自分しかない。そう考えて生活すればこの世界からは殺人、暴力、いじめなどはなくなるのではないか。「命」という儂く、尊い存在をみんなで尊重しあい、生きていきたい。